

「学問への扉」の新規開講を迎えて

佐藤	慶太	(大学教育基盤センター准教授)
小坂	有資	(大学教育基盤センター特命講師)
蝶	慎一	(大学教育基盤センター准教授)
寺尾	徹	(大学教育基盤センター共通教育部長)
岡田	涼	(教育学部准教授)
井藤	隆志	(創造工学部教授)
田中	直孝	(農学部教授)
守田	逸人	(教育学部教授)

1. 「学問への扉」とはどのような科目か

1-1. 「学問への扉」の位置づけ

「学問への扉」は、「新入生の多様な興味関心に答えながら、高校とは異なる大学の学びの面白さ＝驚嘆や喜びを体感させ、学生の知的関心を広げる」（香川大学、2022a、11 頁）というコンセプトのもとで新たに開設された科目群である。これまで香川大学には、「大学入門ゼミ」、「情報リテラシー」という大学での学びの基礎作りを担う科目があったが、学生の所属学部の圏外にある学問分野の面白さや学ぶ意義を伝えることを明示的な目的とする科目群は存在しなかった。「学問への扉」はこの空白を埋めるべく開設されたものである。

大学での学びの面白さを伝えるといっても、いくつかのアプローチが考えられる。そのため「学問への扉」は、三つの下位区分を有する構造になっている。各下位区分の趣旨は以下のとおりである（香川大学、2022a、11 頁、著者が一部改変）。

【読むことのすすめ】

読み物が持つ世界の広がりや深さを経験することを通じて、学問的なものの見方に触れながら、「知的に読む」習慣を身につけることを目指す。書籍や書物に限定せず、新聞やウェブサイト、場合によってはデータなどもテーマにすることが可能である。

【研究のみかた】

自然に働きかけて自然の仕組みを探究する自然科学的実験や、対象となる人物や事柄に接近して社会や文化を探究する調査方法、自然や社会の状態を示すデータの収集・分析を通じて事柄の背後に潜む法則性を明らかにする統計的調査など、具体的な研究探究活動の実際に触れることを通じて、学問の面白さを感じることを目指す。

【学びへのいざない】

学生の多様な興味関心を入り口に、高校の勉強とは異なる、人文・社会・自然科学などの多様な学問的視点やアプローチの仕方を学び、現代社会の諸問題に対する各学問の意義に出会うことを通じて、様々な視点からものごとを見つめること、幅広く学ぶことの面白さを実感すること目的とする。

この三区分の基礎には、学問の面白さを伝えるにあたり〈「読む」という行為〉、〈方法〉、〈内容〉に焦点を絞るべきである、という新カリキュラム構想時の理念がある。特に〈「読む」という行為〉がその一角をなす点には、2018年度に学問基礎科目「書物との出会い」を立ち上げた際の教養観——「読むこと」こそが「未知の体系的知に接したときの驚嘆、そのような体系的知の広がりや深さの予感」を与える——が引き継がれている（斉藤ほか、2018、132頁）。

1－2. 2022（令和4）年度「学問への扉」科目の実施概要

では2022年度の実施状況を科目一覧に照らしてみよう。

表1 2022年度における「学問への扉」開講科目一覧

講義題目	期間	担当教員
読むことのすすめ		
メディアとなるもの	1Q	小坂、大村、柴田（悠）
本との出会いで広がる世界	1Q	蝶
研究のみかた		
やってみる科学	2Q	寺尾（徹）
教育の“これまで”と“これから”を考える*	1Q	岡田（涼）、小方（朋）
学びへのいざない		
越境する学問Ⅰ	1Q	蝶、高橋（尚）、寺尾（徹）、西本、野村、石井（一）
越境する学問Ⅱ	1Q	佐藤（慶）、岡田（徹）、三宅（岳）、石井（知）、舟橋、鶴町、横平
SDGs 学入門	3Q	寺尾（徹）、小方（直）
デザインのすすめ*	1Q	井藤、大場、石塚（昭）、釜床、南
自然科学へのいざない*	1Q	田中（直）、水田、林（敏）、和田
国境を超える看護学～ユニバーサルヘルスカバレッジ*	3Q	清水（裕）、芳賀、西村（亜）
近代と科学*	1Q	石井（一）
世界の言語と文化	2Q	寺尾（徹）、上村、ウィリー、佐藤（慶）、三宅（岳）、バテン、高橋（尚）
大学的香川ガイドⅠ	1Q	守田、寺尾、平
大学的香川ガイドⅡ	2Q	守田、寺尾、平

香川大学（2022b）11頁を参照し筆者作成。*は科目領域グループを母体として開講された科目のしるし。

表1は、「学問への扉」の枠で開講されている科目を、開講期間と担当者の情報を含めてまとめたものである。表1にあるように「学問への扉」では14科目（「読むことのすすめ」2科目、「研究のみかた」2科目、「学びへのいざない」10科目）が開講された。複数担当

者によるオムニバス講義が多いことが分かるだろう。この授業形態には、「学生の所属学部・部の圏外にある学問分野の面白さ」を幅広く伝える、という科目の理念が反映されている。リソースについていうと、旧来の主題科目、学問基礎科目からの移行による開講、教員のボランティアによる開講、2022年度から新たに始まった科目領域コーディネーター制度によるもの、の三種類がある。科目領域コーディネーター制度とは、全学共通教育における科目提供の母体である26の科目領域を5つのグループに分けて、そのなかで学際的な科目開発およびグループ間の助け合いを目的とした仕組みである。5つのグループが表2のように区分され、それぞれグループミーティングによって、科目の開発や領域間の助け合いについて議論を行う。ミーティングは科目領域から選出された全学共通教育コーディネーターと各科目領域幹事によって行われ、前者が議論をリードする（寺尾ほか、2022、28頁以下参照）。

表2 科目領域グループの区分

グループ	科目領域
A	哲学・倫理学、芸術、歴史学、文学、言語学、地理学、英語、初修外国語、日本語
B	心理学、社会学、教育学
C	法学、政治学、経済学、経営学
D	数学、地球科学、物理学、化学、生物学、統計学、情報科学
E	医学、看護学、健康スポーツ

なお「学問への扉」の開講については、本号所収の「全学共通教育の令和5年度実施に向けた研修会（FD）報告」にも関連情報が掲載されているので参照されたい（51-54頁）。
（佐藤慶太）

2. 実施報告

以下、2022年度に「学問への扉」として開講された科目のうち、12科目（「大学的香川ガイド」は同内容で2科目の開講であるため、報告はまとめていただいた。よって報告の数は11となる。）の実施報告を掲載する。本稿のために第1クォーター、第2クォーターで開講されている科目の担当者（オムニバスの場合は代表者）12名に実施報告の依頼をおこない、11名から快諾を得た。第3クォーターの科目については依頼をしていなかったが、「SDGs学入門」の代表担当者が自主的に報告を提出してくださったので、これも掲載する。

実施報告では、(1) 授業の概要と、(2) 「学問への扉」（「読むことのすすめ」／「研究のみかた」／「学びへのいざない」）として開講する際の工夫、の2点について執筆していただいた。オムニバス授業の場合は、とりまとめを行った教員に執筆をお願いしている。

2-1. 読むことのすすめ「メディアとなるもの」

(1) 授業の概要

授業のテーマは、「メディアとなるもの」である。具体的には、地図、芸術祭、民藝と関係する書物等を読み解くことを通じて、「メディアとなるもの」の新たな魅力を探るというものである。本授業は前年まで「視ることと読むこと」をテーマとして開講されていた授業をもとにしているため、メディアにまつわる書物や事物を扱うという点でこれまでの経緯を踏まえつつ、履修者の興味・関心を惹く名称の設定がなされている。

授業は、3名の教員によるリレー講義とフィールドワークで構成されていた。第2回～第7回では、3名の教員が2回ずつ、地図、芸術祭、民藝というトピックについて講義を行った。これらの授業での学びをいかして、第8回では栗林公園でフィールドワークを実施した。学生は、樹木医の方のガイドを聞きながら栗林公園を観察し、「栗林公園をメディアとして考えたとき、何がみえてきたか」という課題に取り組んだ。授業の構成は、表3の通りである。なお、第8回の授業後に、学生は、3名の教員が各3冊指定した課題図書の中から1冊を選択し、レポートを作成した。

表3 授業の構成¹⁾

	授業のテーマ：メディアとなるもの
第1回	オリエンテーション：教員自己紹介、シラバスの説明
第2回	メディアとなるもの① メディアを取り巻く議論（柴田悠基）
第3回	メディアとなるもの② 書物と地図（柴田悠基）
第4回	芸術祭と地域社会① 「メディア」としての芸術祭（小坂有資）
第5回	芸術祭と地域社会② 「メディア」としてのアートボランティア（小坂有資）
第6回	民藝とは何か① 「メディア」としての民藝（大村隆史）
第7回	民藝とは何か② 民藝の現在地（大村隆史）
第8回	栗林公園でのフィールドワーク

(2) 「学問への扉」（「読むことのすすめ」）として開講する際の工夫

第1に、学生が授業科目名を見て、どのような授業内容なのだろうかと興味をもってもらうために、「メディアとなるもの」とした。上記の通り、いわゆるメディアのみを扱う授業内容ではなく、メディアとしての地図、芸術祭、民藝などを扱う授業内容になっていたからである。

第2に、教室での授業に加えて、栗林公園でフィールドワークを実施した。学生は、各自の身体というメディアで栗林公園を体感し、メディアとしての栗林公園について考察するという課題に取り組んだ。栗林公園をフィールドに採用した理由は、(1) 栗林公園には時代別の古地図もあり、(2) 栗林公園はかつて瀬戸内国際芸術祭の作品が展示された場所であり、そして(3) 栗林公園内には讃岐民芸館があるからだ。つまり、教室で学んだメディアに関する知識を、フィールドワークで活用することができるからである。ちなみに、香

川県キャンパスメンバーズ制度²⁾により、香川大学に在学する学生は身分証明書（学生証等）を提示することで、無料で栗林公園を利用することができる。

このように学内外で授業を行うことで、学生の学び心を起動させ、書物等を読み解く行為へと誘う仕組みにした。以下は、栗林公園でのフィールドワークの写真である。なお、以下の写真は、学生と樹木医の方に使用について説明をしたうえで、掲載している。



図1 栗林公園でのフィールドワークの様子

(小坂有資)

2-2. 読むことのすすめ「本との出会いで広がる世界」

(1) 授業の概要

本授業は、「書物の面白さや多様な体系的知の世界を理解するために、著者（書き手）と読者（読み手）の双方の立場、視点から学問的な書物を主体的かつ批判的に『読むこと』ができるようになる」ことを目的とした。表4の通り、高校までの勉強で経験してきた「読む」という行為を振り返りつつ、学問的な書物を習慣的・批判的に「読むこと」を経験し、学部専門課程に進む際に必要な学問的基礎を身につけることを主な到達目標とした。多くの回で授業終了前に「振り返りシート」を課し、次の授業の冒頭で受講生が書いた複数の「振り返りシート」を抜粋し、紹介した。これにより、教員からのコメントに加え、受講生どうしで「読むこと」という学びの経験を共有する時間を多く作ることができた。

表4 授業計画と主なテーマ

	実施概要
第1回	オリエンテーション — 「読むこと」とは何か
第2回	大学生をめぐる「読むこと」の実態と課題
第3回	学問的な書物との出会いと面白さ
第4回	著者（書き手）の視点・立場から「読むこと」
第5回	読者（読み手）の視点・立場から「読むこと」
第6回	批判的に「読むこと」の具体的な方法と実践
第7回	書評（ブックレビュー）を「読むこと」
第8回	まとめ（ディスカッション）

(2) 「学問への扉」（「読むことのすすめ」）として開講する際の工夫

高校までの学習との接続を意識し、本授業では、扱うトピックやテーマ、文献資料等を選定した。例えば、第3回から第5回では、過去の大学入試等で出題された文章を素材とし、いわゆる入試問題の文章としてではなく、「著者（書き手）の視点・立場」であらためて「読むこと」を経験させることにした。また、第6回では、批判的に「読むこと」について、グループ・ディスカッションを行う時間を設けることで「読む」という行為を受講生どうしで言語化し、共有する機会を設定した。本授業後も「学び心を起動」し、学問的な書物を「読むこと」を継続するきっかけとなるよう、最終課題では、受講生自身が興味関心を持った学問的な書物の一部、あるいは、全部を簡潔に要約、紹介し、その見方や面白さを論じるレポートを課した。以上より、リフレクションの機会を設ける工夫を行った。

（蝶 慎一）

2-3. 研究のみかた「やってみる科学」

(1) 授業の概要

科学実験に触れることは実験室でなくても可能なのではないか。この授業では、実験室ではなく一般教室における座学によって、学生に多様なテーマでの問題意識と実験方法の提案を与え、教室の机上あるいは自宅や学外の現場で、実験することを通して科学する喜びや驚きを実感することをコンセプトとして構想され、7名の教員の参加を得た。座学解説と実験、解題の組み合わせ方法を工夫した。実験によっては座学解説と実験、解題を1回の授業内で完結することが適切である場合もある。座学解説から1・2週間の時間を与えて教室外での自由な実践を促し、その後の授業で解題したテーマもある。そこで、毎回の授業を前半と後半に分け、教員の希望に沿って7つのテーマの実験をいくつかのタイプに分類し、それらを組み合わせることにより、8回の授業を構成している。(表5を参照)。

表5 授業を構成するトピックスと実施方法

	トピック名	教員 ^{a)}	学部等	タイプ ^{b)}
トピック1	みんなで地図を作ってみる科学	野々村	創造工	B[2]
トピック2	ストロートンボ・ペーパーシード	高橋(尚)	教育	A
トピック3	雲をつくり気候変動を考える科学	寺尾(徹)	教育	B[2]
トピック4	公園の砂場でみる摩擦の科学	山中(稔)	創造工	A
トピック5	光と色～光と物質の相互作用の科学	鶴町	創造工	B[1]
トピック6	天然パン酵母を培養してみる科学	野村(美)	農	B[2]
トピック7	計算からパターンを抽象化する科学	杉野本	教育	A

a) 敬称略。b) Aは1回完結型。Bは2回分割型で、B[1]、B[2]はそれぞれ中1、2週間開けていることを示す。

(2) 「学問への扉」(「研究のみかた」)として開講する際の工夫

できるだけ多様な科学への興味を引き出せるように、自然科学だけでなく数理科学の実験も加えている。本来的には、人文社会科学系の科学実践(調査活動やフィールドワーク、統計的解析等)も含めたいが、現在はまだ実現していない。次年度以降の実現を期したい。しかし、「学問への扉アンケート」の結果(例えば、「中学、高校になるにつれて、<略>身近なものを使った実験はやらなくなっていた<略>高校では受験勉強で理科には辟易していたが、科学の面白さを再度甦らせることが出来たと思う。))を見る限り、理科系の学問への苦手意識を持つ文系学生の関心を引き起こしたり、実践的に科学する魅力を実感することを通じて、広く学問への関心に結びついたりといった成果につながっていると評価している。

(寺尾 徹)

2-4. 研究のみかた「教育の“これまで”と“これから”を考える」

(1) 授業の概要

この授業は、「学問への扉」の中の「研究のみかた」に位置づくものである。大学での学びの入門科目として、研究の過程に触れることを重視した。特に、「問いを立てること」と「問いに対する答えを導くこと」に焦点化した。題材として、どの学生にとっても身近で考えやすい教育に関する経験を扱った。自身の教育に関する経験をもとに問いを立て、根拠となる情報を収集し、問いに対する自分なりの答えを他者に伝えるという研究の過程を経験することが本授業のねらいであった。

(2) 授業の形態と工夫

授業はグループ単位での活動を主体として進めた。3～4人からなるグループで1つの研究を進める形をとった。授業では次の点を工夫した。1点目に、学生の活動を主として進めるようにした。大学での学びに関する姿勢として自発的に行動することの意義を実感してもらいたいと考え、研究テーマの設定や訪問する教員の選択など活動の主要部分は学生に任せた。2点目に、異なる学部から成るグループを編成した。同じ教育に関するテーマに対しても多様な見方があり得ることを経験してもらうために、どのグループにも3つ以上の学部の学生が混在するように編成した。3点目に、科目領域グループB所属のすべての教員が授業に関わる可能性をもつようにした（科目領域グループについては、1-2を参照）。この授業では、問いに対する答えの根拠について、教員を訪問して情報を得ることを重視した。グループB所属の教員はすべて訪問可能として学生に名前と専門を示したリストを提示した。そのことによって、すべての教員が授業に関与する可能性を持たせると同時に、学生の興味関心にあった教員とマッチングすることを担保した。訪問を受けた教員の大部分は、最後の発表会にも参加して下さった。

(3) 授業の成果と課題

授業に対する感想について、KH coder を用いて共起ネットワークを作成した（下図）。教員訪問から得た情報をもとに自分たちの研究を組み立てて発表したこと、学部を超えたグループでの作業や役割分担、問いを立てることの難しさ等について言及した感想がみられた。授業のねらいについて学生自身に感じられるものがあつたことが伺え、一定の成果があつたといえる。

一方、授業者としては、研究の過程の一部しか扱えてないこと、作業時間を十分に確保できなかった

こと、教員訪問のタイミングが難しかったこと等の課題を感じている。

（岡田 涼）

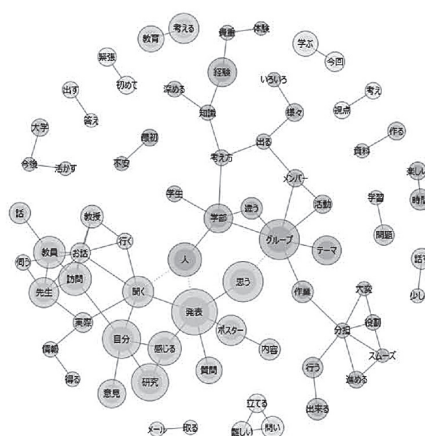


図2 学生の感想に対する共起ネットワーク

2-5. 学びへのいざない「越境する学問（イ）」

(1) 授業の概要

「越境する学問」は、専門分野の異なる複数の教員による講義を通じ、多様な「学問的な視点やアプローチの仕方を学び」、「各学問の意義を理解する」とともに、「学問の魅力、大学での学びの意義について語り（合い）」、「学びの構えを身につける入門科目」である。授業自体は、担当者が異なる2つの授業（「越境する学問（イ）」、「越境する学問（ロ）」）で実施した。表6の通り、「越境する学問（イ）」では、6名の教員が各回を担当するオムニバス形式を採用した。第2回から第7回では、前半に教員自らが専門分野に係るガイダンス的な講義を行い、基本的な知識・理解を促し、後半に別の教員がその講義内容に対してコメント等を行う流れで構成した。本授業を通して、受講生自身がなぜ「専門分野以外の分野を学ぶ必要があるのか」という自分なりの問いを立てる契機とし、高校までの「勉強」から探求を行う「研究」の世界へ誘う意図も込め、運営した。また、受講生からの質疑応答に加え、「振り返りレポート」を課すことでリフレクションの機会も積極的に設けた。

表6 授業計画と主なテーマ

	実施概要
第1回	イントロダクション・教員の自己紹介・共通テーマの提示
第2回	物理学の話：高橋尚志（講義）＋蝶慎一、学生からのコメント
第3回	教育学の話：蝶慎一（講義）＋寺尾徹、学生からのコメント
第4回	地球科学・気象学の話：寺尾徹（講義）＋西本佳代、学生からのコメント
第5回	社会学の話：西本佳代（講義）＋野村美加、学生からのコメント
第6回	生物学の話：野村美加（講義）＋石井一也、学生からのコメント
第7回	経済学・平和学の話：石井一也（講義）＋高橋尚志、学生からのコメント
第8回	全体ディスカッション・まとめ：6名の全教員、学生からの質疑応答

(2) 「学問への扉」（「学びへのいざない」）として開講する際の工夫

授業の第1回に事前準備をした22の授業テーマから受講生が取り上げて欲しいテーマを3つ選択してもらうことで共通するテーマ（「コロナ」、「貧困」、「ジェンダー」）を設定し、実施したことである。専門分野の異なる教員が、これらのテーマに多様な視点やアプローチで講義を行い、受講生とも双方向のレスポンスを実現することで、受講生と一緒に授業を作ることを具現化した。最終課題は、「広い視野のもとで今後の学びのプランを立て」させることで、受講後も「学び心を起動」する機会を設け、授業の到達目標の達成を促した。

（蝶 慎一）

2-6. 学びへのいざない「越境する学問（ロ）」

(1) 授業の概要

この授業のコンセプトは「分野の違う複数の教員が、受講生が関心をもつテーマを軸に、それぞれの学問の魅力、大学での学びの意義について語り（あい）、学生は、それを聞き、時に参加しながら、大学での学びの構えを身につける」というもの。前項で報告されている「越境する学問（イ）」と同じコンセプトのもと、担当者とテーマ設定に変化を持たせて実施した（イ、ロの両方を受講することはできない仕組みとなっている）。7名の教員によるオムニバス講義である。第2回～第7回では、1～2名の教員が自分の専門分野について講義を行い、別の1名の教員がコメンテーターをつとめる、という形をとった。この際、講義担当とコメント担当が、文系と理系（ないしはその逆）となるように構成している（表7を参照）。

表7 授業の構成

	授業のテーマ
第1回	イントロダクション・教員自己紹介・共通テーマの提示
第2回	化学の話：石井知彦＋舟橋正浩（講義）＋岡田徹太郎（コメント）
第3回	経済学の話：岡田徹太郎（講義）＋横平政直（コメント）
第4回	医学の話：横平正直（講義）＋佐藤慶太（コメント）
第5回	哲学・倫理学の話：佐藤慶太（講義）＋石井知彦＋舟橋正浩（コメント）
第6回	物理学の話：鶴町徳昭（講義）＋三宅岳史（コメント）
第7回	哲学・倫理学の話：三宅岳史（講義）＋鶴町徳昭（コメント）
第8回	まとめ（教員全員によるディスカッション）

(2) 「学問への扉」（「学びへのいざない」）として開講する際の工夫

講義内容が学生の興味関心に沿うものとなるために、初回の授業で Microsoft Forms の投票機能を使って、教員があらかじめ用意した22のテーマから、学生が取り上げてほしいテーマを三つ選んでもらい、それについて教員が講義をすることとした（今年度の授業のテーマは「気候変動」、「食物」、「証拠、エビデンス」）。これを前提として、2回目以降の授業で異なる分野の教員同士が対話をする時間を設けることによって、「学生の多様な興味関心を入り口に」、「人文・社会・自然科学などの多様な学問的視点やアプローチの仕方を学ぶ」という「学びへのいざない」のコンセプトの実現を目指した。対話の時間は、教員にとっても実り多いものとなったようである。その他、最終課題として、今後の学びのプランを提出させ、初年次後期以降の履修計画について意識させる工夫もしている。

（佐藤慶太）

2-7. 学びへのいざない「SDGs 学入門」

(1) 授業の概要

人類の持続可能性にとっての重要性もさることながら、SDGs は文系理系の枠を超えた諸学問への総合的入り口としても機能しうる課題である。この授業は SDGs を所与の正義と位置付けるのではなく、「背景となっている 21 世紀社会の危機の特徴。危機を回避するための目標として SDGs は充分なのか。SDGs を達成することは可能なのか」を問い、SDGs への批判的検討を含め、自由な学問的接近を意図して開講した。同時に SDGs を抽象的にとらえるのではなく、香川大学における SDGs 達成を目指す多様な研究活動を紹介するとともに、学生として実施できる SDGs に貢献する多様な具体的活動を提起し、その実施をレポート課題として与えた。これらの学生への課題は、15 個の「やってみる SDGs レシピ」集に集約した。研究戦略室の全面的支援を受け、2 名の URA の協力とゲスト講師としての講義、および学内の多様な研究シーズの紹介をしていただいた。このことも本授業の重要な特徴であった。

表 8 授業の構成

	授業のテーマ
第 1 回	イントロダクション・「SDGs って何だろう？」(寺尾 (徹)・小方 (直))
第 2 回	地球と生物から見た SDGs (寺尾 (徹)・河合 (史)・玉川 (晋))
第 3 回	人間と社会から見た SDGs (小方 (直)・神野)
第 4 回	香川大学 SDGs の取り組み (その 1)
第 5 回	香川大学 SDGs の取り組み (その 2)
第 6 回	SDGs を根本から考えてみる (藤原辰史 (京都大学人文研)・野村 (美))
第 7 回	やってみる SDGs (実践とレポート)
第 8 回	まとめとディスカッション (小方 (直)・寺尾 (徹))

(2) 「学問への扉」(「学びへのいざない」)として開講する際の工夫

SDGs そのものについての整理された基本理解と同時に、第 2 回目のどちらかという文理系的なアプローチ、第 3 回目の人文社会学的なアプローチを有機的に組み合わせることで、多様な関心にかみ合わせることを意図した。第 4・5 回目の取組紹介も、できるだけ多くの学部等から取り組みを紹介し、全面的な内容となるように工夫した。学生個々人の学問との出会いの場としての対話を重視する観点から、毎回の授業でできるだけ学生の質問や意見表明を促し、評価する立場を明確にして運営した。大学における答えのない学問としての講義内容を多くの学生が積極的に受け止めてくれたことは、授業評価アンケートと学問への扉アンケートに表れている。最終課題として、SDGs と結びつけての今後の学びへの抱負を提出させた。

(寺尾 徹)

2-8. 学びへのいざない「デザインのすすめ」

(1) 授業の概要

近年のデザインは狭義な意味で造形や色彩を計画・表現するだけのものではなく、我々の暮らしや社会における様々な場面において、問題解決のための思考・概念を組み立てに役立つ手法として認知されてきている。プロダクトデザイン、建築デザイン、ビジュアルデザイン、サービスデザインの各専門分野の教員が、その領域の事例から多様なデザインを例に、デザインの背景にある思考と表現を紹介していった。多様なデザインを通してこれからの社会におけるモノやコトの見方を身につけることを目標としている。

表 9 授業の構成

	授業のテーマ
第1回	ガイダンス デザインとは？（創造工学部 井藤隆志）
第2回	建築デザイン 概要と事例紹介（創造工学部 釜床美也子）
第3回	プロダクトデザイン1 概要（創造工学部 大場晴夫）
第4回	プロダクトデザイン2 事例紹介（創造工学部 大場晴夫）
第5回	ビジュアルデザイン 概要と事例紹介（創造工学部 南政宏）
第6回	サービスデザイン1 概要（創造工学部 石塚昭彦）
第7回	サービスデザイン2 事例紹介（創造工学部 石塚昭彦）
第8回	まとめ 最終レポート（創造工学部 井藤隆志）

(2) 「学問への扉」「学びへのいざない」として開講する際の工夫

学生の興味関心に沿う内容とし、学ぶ楽しみを広げ、深めることを基本に置き、学生の身近にあふれているデザインが、どのような背景と過程から生まれたのかを紹介し、様々な分野のデザインを紹介していった。授業構成として、モノのデザインからサービスのデザインへ徐々に視野を広げるようにオムニバス形式の内容とした。従来のデザインの対象が、機能（住む、使う、伝える）のデザインから、意味（ソーシャル、サービス、エクスペリエンス）へ移行してきていることを伝え、デザインがデザイナーだけの行為ではなく、広く様々な分野・領域で役立つ思考と表現であることを感じてもらえるよう授業を構成した。自然科学と人文・社会科学の知を合わせる総合知を獲得するために、分析的思考と直感的思考をハイブリッドに展開できる人材になり、VUCA と呼ばれる不確実性の時代に活躍する創造性が高い人材を目指すために、広く柔軟に学ぶベースを作るよう心掛けた。

（井藤隆志）

2-9. 学びへのいざない「自然科学へのいざない」

(1) 授業の概要

この授業は、様々な学部で1年生を対象とし「幅広い自然科学の重要性、学ぶことの意義や楽しみを認識するだけでなく、あらゆる専門性や社会につながっていることを共に考える」という内容である。3名の教員と1名のコーディネーターによるオムニバス講義とし、各教員は担当する2回の講義の中で、様々な自然科学の話題を提供し、知り・疑問を持ち・共感することで、自然科学への興味や関心をもってもらうことを目的とした。自分や他の学生が抱いた疑問や気づきを共有することで、科学的な視点を養うことができるようになることも、もう一つの目的とした。各自の専門を学ぶ過程や大学生として活動していく中で、自然科学との連関を意識できるようになることを期待した。(表10を参照)。

表10 授業の構成

	授業のテーマ
第1回	イントロダクション・教員自己紹介【水田教員（農学部）林教員（創造工学部）和田教員（医学部）田中教員（農学部・コーディネーター）】
第2回	作物生産科学へのいざない：水田教員（講義）＋コメント教員＋コーディネーター
第3回	質疑応答重視の時間：水田教員（講義）＋コメント教員＋コーディネーター
第4回	情報科学へのいざない：林教員（講義）＋コメント教員＋コーディネーター
第5回	質疑応答重視の時間：林教員（講義）＋コメント教員＋コーディネーター
第6回	化学研究へのいざない：和田教員（講義）＋コメント教員＋コーディネーター
第7回	質疑応答重視の時間：和田教員（講義）＋コメント教員＋コーディネーター
第8回	総合の質疑応答とまとめ（教員全員と学生による質疑応答）

(2) 「学問への扉」（「学びへのいざない」）として開講する際の工夫

可能な限り、主担当ではない教員も参加し、3から4名の教員が各回の講義に関わった。偶数回：主担当教員は講義途中に1年生へ簡単な質問を投げかけたり、口頭質問を受ける時間を作ったりすることを積極的に行い、コーディネーターは、マイクを学生に渡すまでの時間を利用して相槌やコメントを担当した。奇数回：感想や課題内容をもとに、補足情報を提供しつつ、質疑応答の時間をとるようにした。最終回：各回、8回目は全ての時間を学生からの質疑応答に充てることを繰り返し伝えておいたことから、予想以上に学生からの挙手があり、他学部学生の質問内容からの気づきや、時には、質問から派生した教員間でのやり取りそのものが、学生への科学に対する関心や新たな疑問の醸成につながったようである。

(田中直孝)

2-10. 学びへのいざない「世界の言語と文化」

(1) 授業の概要

本学の教員の多くも、異文化や未知の言語との様々な出会いの中で人生を楽しむとともに、教育と研究に携わってきている。この講義では、これら異文化や未知の言語との出会いの多様な過程をそれぞれの専門も少し踏まえながら語ることを通じて、学生に世界の諸言語を学ぶ意義やその背景をとらえる視線、更には文系・理系の枠を超えた学問への関心を広げることを目的としている。2018年度まで語学と言語学に基礎を置いて主題Bとして開設されていた授業「世界の言語～言葉の世界」(主題B)を基盤に、2019年度からより広く言語の背景を内容に加えることにより、広く世界の成り立ちに迫りうる科目として再スタートをしたものである。こうした科目特性から「学問への扉」に適合した科目として新たなスタートを切ったものである。表11にあるように、理系教員を含めた内容となっている。

表 11 授業の構成

	授業のテーマ
第1回	ガイダンス・導入 (寺尾徹)
第2回	フィンランド語は猫のことば? (植村友香子)
第3回	World Englishes (イアン・ウイリー)
第4回	ヨーロッパ文化の源流—ラテン語の世界 (佐藤慶太)
第5回	フランス文化を歩く: 革命からアートまで (三宅岳史)
第6回	ニュージーランドの自然環境保護の現状と課題 (ポール・バテン)
第7回	ヨークシャーの暮らし方 (高橋尚志)
第8回	まとめの授業・インド亜大陸北東部の諸民族の言語と文化 (寺尾)

(2) 「学問への扉」(「学びへのいざない」)として開講する際の工夫

もともとのコンセプト・内容には環境問題や文化の源流における自然科学の営みの存在、理系教員による研究現場やフィールドワークの現場における異文化や未知の言語との出会いの語りを含んでいたことから、「学びへのいざない」に適した科目としての設計となっていたと考えられる。同時に、多くの学部学生を受け入れるとともに、多様な学問への関心を広げることを重視している科目の趣旨について教員への連絡を行い、少し意識してもらうこととした。

(寺尾 徹)

2-11. 学びへのいざない「大学的香川ガイド」

(1) 授業の概要

この授業では、2022年3月に本学教員を中心に様々な専門分野から執筆陣を揃えて編んだ守田逸人・平篤志・寺尾徹編『大学的香川ガイド』（昭和堂）の執筆者をゲストスピーカーに招き、各担当執筆部分を中心に講義している。個々の講義では、本論の内容をなぞらえるだけでなく、触れ得なかった裏話や、本論からさらに掘り下げた議論、若干本論から外れた担当者自身の研究分野の話などを織り込んで、授業を展開している。

表12 授業の構成（(イ)・(ロ)のうち、(ロ)の例）

	授業のテーマ
第1回	大学での学びへのイントロダクションとレポート課題の解説
第2回	ゲストスピーカー：長谷川修一「大地の成り立ちからみた香川の風土」
第3回	ゲストスピーカー：佐藤竜馬「讃岐の港町を歩く」
第4回	ゲストスピーカー：時岡晴美「金毘羅参詣と門前町」 こんぴら歌舞伎」
第5回	ゲストスピーカー：寺尾徹「気候からみた香川県ガイド」
第6回	ゲストスピーカー：庄子幸佑「讃岐建築の自画像」 庄子幸佑
第7回	ゲストスピーカー：高倉良一「自転車のまち高松」
第8回	まとめとレポート課題の解説・大学の学びのひろがりについて

(2) 「学問への扉」（「学びへのいざない」）として開講する際の工夫

この授業は、香川大学の〈学問への扉〉を叩いた本学学生に対し、主に本学教員が香川県に関わる諸事象を題材に深めた最新の学問的成果を素材として展開している。また、受講生が香川県の諸事象とともに、広く地域のあり方について考えることを促すため、文系・理系双方の分野からバランス良くテーマを選定して構成した。具体的には気候・地質・地形など香川県の自然環境・風土に着目し、それに規定されて育まれた民俗文化・歴史を考え、それらと密接に関係して形成された現代社会の諸問題を議論する構成である。

受講生はこうした学びを経て、単に香川県について知るだけでなく、広く世界のなかの香川県の位置を知るとともに、あらゆる地域の成り立ち方を理解するための考え方を身につけることになると考えている。また、こうした学びを経た学生自身がやがて探求者となり、あるいはその成果の発信者なることで、様々な地域やそこに生きる人々が未来に向かって存続、生存していたためのヒントを豊かにしていくことになると考えている。

（守田逸人）

3. おわりに

本稿では、「学問への扉」開設の経緯と実施概要を確認したうえで実施報告をまとめた。授業の実施報告を読むと、扱われている学問分野が多様であることはもとより、その実施方法、工夫の多彩さに驚かされる。香川大学の教員は、常々「学問の面白さをどうつたえるのがよいか」という問いを念頭に置いて研究・教育に携わっており、その経験の中で蓄積されたアイデアが、「学問への扉」開講という機会を得て、実体化しあふれ出てきた、という印象を得る。新規開設の授業群として、もちろん拡充の余地はあるとはいえ、最高のスタートを切ることができたと言えるのではないだろうか。

もちろん、できたばかりの科目であり、今後の課題も考えられる。第一に、これらの授業を学生はどう受け止めたのか、この点の検証が必要である。「学問への扉」では特別に、受講生を対象としたアンケートを受講前、受講後に行っている。これらのデータを詳細に分析し、今後の改善につなげていかなければならない。

第二に、教員の負担の問題がある。先に述べたように「学問への扉」では、主題科目、学問基礎科目からの移行によって開講されたものもあるが、純然たる新規科目も少なくない。喜ばしいことであるが、その裏面として新たな負担を担っている教員がいることも確かである。オムニバス授業がいくつかあるが、取りまとめを担当している教員には、個人で担当する授業と同等、あるいはそれ以上の負担がかかっている可能性もある。今後の安定的開講のためにも、増加した負担の明確化と、それを踏まえた特定の教員に負担が集中しないような開講スタイルの確立が必要となる。

第三に、授業のノウハウの蓄積と情報共有の方法を探ることが、この科目をより充実させていくために必要である。負担の問題とも関係するが、より効率的な授業運営の方法なども、担当者間で共有し、新規担当者にうまく継承することが望ましい。この点については「学問への扉」実施部会にどのような役割を担わせるのかという問題とも関連している。いくつかの課題を指摘したものの、香川大学ならではの初年次教育科目の一端を最高の形でスタートできたことは間違いないだろう。これから、より多くの教員が「学問への扉」に関わり、この科目群がより充実していくことを願うばかりである。

注

- 1) 各報告にある表（授業の構成）に書き方のばらつきがあるが、これはシラバスの表記に準じたものである。
- 2) 香川県キャンパスメンバーズ制度の対象となる施設は、栗林公園、香川県立ミュージアム、東山魁夷せとうち美術館である。香川県キャンパスメンバーズ制度の詳細については、香川大学のウェブサイト（<https://www.kagawa-u.ac.jp/17689/> 2022年11月30日閲覧）を参照されたい。

参考文献

香川大学（2022a）『教員ハンドブック』香川大学。

香川大学（2022b）『全学共通科目 開講科目表及び時間割 2022 年度』香川大学。

斉藤和也・中谷博幸・佐藤慶太・西本佳代（2018）「全学共通科目「書物との出会い」の本格実施を迎えて」『香川大学教育研究』第 15 号、131-145 頁。

寺尾徹・葛城浩一・佐藤慶太・西本佳代・岡田徹太郎・三宅岳史・徳田雅明・高水徹・高橋明郎・宮崎英一・野村美加（2022）「新カリキュラムの始動へ向けた取り組み」『香川大学教育研究』第 19 号、13-31 頁。